

望ましい学級担任像に関する大学生の意識

—学級担任の予期的社会化の限界と教育言説の呪縛—

長谷川 祐 介 ・ 白 松 賢

大分大学教育学部附属教育実践総合センター紀要第40号 2023

(別 冊)

望ましい学級担任像に関する大学生の意識

—学級担任の予期的社会化の限界と教育言説の呪縛—

長谷川 祐 介* 白 松 賢**

(令和5年1月18日受理)

【要 旨】 本稿は、教職課程を履修している大学生を対象に実施した学級経営に関する意識調査のデータを用いて、望ましい学級担任像に関する大学生の意識を検討した上で、望ましい学級担任像と教職の予期的社会化の関連、ならびに望ましい学級担任像と教職イメージの関連について分析を行った。分析の結果、「教職専門性をもつ学級担任」という画一化された学級担任像を望ましいと考える大学生が多いこと、そして学級担任の予期的社会化には限界が見出される一方、教育言説により束縛された上で大学生は望ましい学級担任像を描いていることが示唆された。その上で、子どもの主体性を重視した学級経営、ならびに支配的な教育言説からの解放について考察した。

I 問題の所在

本稿の目的は、教職課程を履修している大学生を対象に実施した学級経営に関する意識調査のデータを用いて、望ましい学級担任像に関する大学生の意識を明らかにすると同時に、望ましい学級担任像と教職の予期的社会化の関連、ならびに望ましい学級担任像と教職イメージの関連について明らかにすることである。

子どもたちの学校生活において学級は重要な集団であり、学級を担任する教師（学級担任）は学級の中で重要な役割を担うこととなる。本稿では、教職課程を履修している大学生が考える学級担任像（教師像）に着目したい。なぜ大学生が考える学級担任像に着目するのか。その理由として次の2つがあげられる。

第1は、学級における指導支援のあり方は、学級担任像の影響を受けている可能性が示唆されるからである。教師は社会が規定する教師像に縛られている（山田 2018）。教職課程を履修している大学生が描く学級担任像は、学生が教師になったときの自身の振る舞いに影響を及ぼし、さらにそれを媒介して、担任をする学級の子どもの生活に何かしらの影響を及ぼすことが推察される。

本稿は、日本子ども社会学会第28回大会（2022年6月）において発表した長谷川祐介・白松賢「学生が描く学級担任像 —学級経営意識調査の分析を通して—」の題目ならびに内容の加筆修正を行ったものである。

* はせがわゆうすけ 大分大学教育学部発達科学教育講座（教育学）

** しらまつさとし 愛媛大学大学院教育学研究科

第2は、学級担任像は教職生活における苦しみ の源泉となる可能性があるからである。現在、教師にとって学級経営は不安や心配なものとなっている（白松 2017）。実際の学級経営において様々な困難に直面したとき、大学生の時に考えていた望ましい学級担任像が、教職生活における葛藤の原因となる可能性がある。そのため大学生の時に描いていた理想の学級担任像が、（若手）教師たちの教職からのドロップアウトを促す恐れがある。このことから学生のキャリア形成という点からも学級担任像の分析は重要な研究課題となる。

以上を踏まえ本稿は、教職課程を履修している大学生を対象に実施した学級経営に関する意識調査のデータを用いて、次の3点について分析を行う。

第1は、望ましい学級担任像に関する大学生の意識である。学級担任の望ましい姿やイメージは、学生の教職に対する理想像と大きく関わるがゆえに、どのような学級担任を望ましいと学生は考えているのか、またその望ましい学級担任像に潜在する要因を明らかにする必要があるだろう。

第2は、望ましい学級担任像と教職の予期的社会化の関連である。高井良（2005）など教師研究のレビューからもわかるとおり、教師のキャリア形成は教師研究の重要なテーマとなっている。その中で教職の予期的社会化の重要性が指摘されており、先行研究が蓄積されている（たとえば川村 2003, 太田 2012）。予期的社会化（anticipatory socialization）は、将来を見越した社会化で、所属する集団の価値観を先取りして獲得することである（Merton 訳書 1961）。教職課程を履修し、実際に学校の先生になることを希望している大学生は、予期的社会化により望ましい学級担任像を内面化している可能性がある。このことから望ましい学級担任像と教職の予期的社会化の関連について分析を行う。

第3は、望ましい学級担任像と教職イメージの関連である。社会における教職に対するイメージは、マスコミやSNSなどの影響を受け形成される。昨今、マスコミやSNSなどで話題となる教育問題は教職に関わるものが多い。その代表例は教職がブラックという教職イメージである。そのような社会における教職イメージは教育言説として機能することではないだろうか。今津（1994）によれば「教育言説とは「教育に関する一定のまとまりを持った論述で、聖性が付与されて人々を魅惑させる力を持ち、教育に関する認識や価値判断の基本的枠組みとなり、実践の動機づけや指針として機能するもの」をいう」（今津 1994, p.47）。教育言説そのものを測定することは難しいが、学生の教職イメージが教育言説を投影したものとして捉えるとするならば、大学生が考える望ましい学級担任像と教職イメージとの関連を分析することを通じて、望ましい学級担任像と教職に関わる教育言説の関連を間接的に明らかにすることが出来るのではないだろうか。

以下、分析に用いる調査データについて説明を行った上で、分析結果を示していく。具体的には、望ましい学級担任像に関する大学生の意識について因子分析を行った結果を示した上で、望ましい学級担任像と教職の予期的社会化の関連、ならびに望ましい学級担任像と教職イメージの関連についての分析結果を示す。それらを踏まえ、これからの学級のあり方ならびに大学生のキャリア形成に関して、予期的社会化ならびに教育言説との関連を中心に考察を行う。

Ⅱ 分析に用いる調査データの概要

本稿の分析に用いる調査データは、学級経営意識調査（Google フォームを用いたウェブ調査）である⁽¹⁾。この調査は実施前に大分大学教育学部研究倫理審査委員会において、調査倫理上、問題がないことの承認を得た（2021年4月）。

調査は2021年6月から7月にかけて実施した。4年制大学（国立2校、私立4校）の調査協力者（教職課程の授業担当者）を通じて、各大学の教職課程を履修している大学生に回答を依頼した。調査対象となった大学生は、パソコンやスマートフォン等を用いて調査回答用のURLもしくはQRコードから調査フォームにアクセスし、自ら回答を行った。

調査終了後、データクリーニングを行った結果、有効回答数は777名となった。本稿では、以下の表1で示す望ましい学級担任像に関する項目全てに回答した752名（国立A校145名、国立B校387名、私立C校109名、私立D校31名、私立E校25名、私立F校55名）のデータを用いて分析することとした。ただし752名のデータの中には、望ましい学級担任像以外の変数において無回答等による欠損値があった。そのため、以下に示す分析結果において合計が752名を下回る場合がある。

Ⅲ 分析結果

1 望ましい学級担任像の実際

望ましい学級担任像に関しては「あなたが望ましいと考える学級（ホームルーム）担任の先生として、次の項目はどの程度、あてはまりますか？」という設問に対して、設定した14項目についてそれぞれ「とてもあてはまる」から「まったくあてはまらない」の5件法で回答を求めた。それらの項目の回答結果を用いて因子分析を行った。算出された因子の解釈可能性等を踏まえた上で、14ある項目のうち「校長など管理職の指示には必ず従う先生」という項目を除外した13項目で最尤法による因子分析を行い、因子数3でプロマックス回転を行った結果を採択した。分析結果は表1の通りである。

第1因子は「授業が上手な先生」「コミュニケーション能力が高い先生」など授業指導力や児童生徒とのコミュニケーション能力など教職の専門性に関わる項目によって構成されていた。そこで第1因子を「教職専門性をもつ学級担任」と命名した。

第2因子は、「やさしい先生」「面白い先生」など子どもから見て親しみを感じる教師像に関する項目によって構成されていた。そこで第2因子を「親しみのある学級担任」と命名した。

第3因子は、「子どもたちだけで解決」「子ども自ら課題に気付いて取り組むまでゆっくり待つ」といった子ども自らの行動や意思を尊重する教師像に関する項目によって構成されていた。そこで第3因子を「子どもの主体性を重視する学級担任」と命名した。

翻って各因子を構成する項目の基礎統計量に目を向けたい。第1因子を構成する教職専門性をもつ学級担任に関する項目や、第2因子を構成する親しみのある学級担任に関する項目のほとんどは平均値が4以上と高い値を示していた。「教職専門性をもつ学級担任」や「親しみのある学級担任」を望ましい学級担任像としている肯定している学生が多いといえるだろう。

他方、「子どもの主体性を重視する学級担任」を望ましい学級担任像と肯定的に捉えている学生はあまり多くなかった。このことは「トラブルが起きたとき、子どもたちだけで解決させよ

うとする先生」という項目の平均値が 2.90 に留まっていることなど、第 3 因子を構成する項目の平均値が第 1, 2 因子を構成する項目の平均値より低いことからいえる。

表 1 望ましい学級担任像に関する項目の基礎統計量と因子分析結果（因子パターン）

項目内容	基礎統計量		因子負荷量			
	平均値	SD	I	II	III	
I 教職専門性をもつ学級担任						
授業が上手な先生	4.69	0.65	0.83	0.00	-0.13	
コミュニケーション能力が高い先生	4.60	0.73	0.82	-0.03	0.01	
子どもを依怙臆員（えこひいき）しない先生	4.61	0.77	0.73	-0.04	-0.04	
子どもの反応や心情に応じて柔軟に指導を変える先生	4.60	0.68	0.69	-0.05	0.08	
高度な専門的知識を持っている先生	4.26	0.89	0.64	-0.09	0.00	
悩んだり困ったりしている子どもを励ます先生	4.42	0.78	0.54	0.15	0.13	
子どものことをいつも見守っている先生	4.28	0.87	0.48	0.09	0.20	
問題行動には厳しく注意する先生	3.88	0.94	0.33	0.05	-0.04	
II 親しみのある学級担任						
やさしい先生	4.28	0.82	0.16	0.72	-0.12	
面白い先生	4.38	0.77	0.31	0.59	-0.04	
友だちのように子どもと接する先生	3.26	1.02	-0.20	0.54	0.23	
III 子どもの主体性を重視する学級担任						
トラブルが起きたとき、子どもたちだけで解決させようとする先生	2.90	0.98	-0.14	0.12	0.67	
子ども自ら課題に気付いて取り組むまでゆっくり待つ先生	3.57	0.95	0.25	-0.06	0.54	
因子間相関			I	II	III	
			I	1.00	0.67	0.25
			II		1.00	0.20
			III			1.00

※各項目、選択肢「とてもあてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」を順に 5, 4, 3, 2, 1 と割り当てて分析。

※因子分析は最尤法（プロマックス回転）

以下、望ましい学級担任像に関わる分析では、表 1 で示した因子分析結果によって算出された因子得点（回帰法により算出）を用いることとした。

2 望ましい学級担任像と教職の予期的社会化

(1) 教員志望の程度

望ましい学級担任像はどのように形成されてきたのだろうか。そこで教職課程を履修している大学生の中でも実際に教師になりたいかどうかによって、望ましい学級担任像に違いがあるのか検討した。表 2 は独立変数を教員志望の程度、従属変数を望ましい学級担任像とする一元配置分散分析を行った結果である。

分析結果より、教員志望の程度により望ましい学級担任像に有意な差があった。具体的には「教職専門性をもつ学級担任」や「親しみのある学級担任」においてである。ただし平均値の結果を詳しく見てみると、「教員になるつもりはない」学生のみ、「教職専門性をもつ学級担任」で -0.38、「親しみのある学級担任」では -0.44 と低いものとなっていたが、それ以外はおおむね平均値の値が 0 に近かった。さらに効果量 (η^2) の値を見てみると、いずれも 0.01 と小さかった。すなわち望ましい学級担任像について「教職専門性をもつ学級担任」や「親しみのある学級担任」を肯定するかどうか教員志望の程度による違いはあるものの、その違いは限定的であるといえるだろう。

表 2 教員志望の程度による望ましい学級担任像の違い（一元配置分散分析の結果）

		N	平均値	SD	有意差	効果量 (η^2)
教職専門性をもつ 学級担任	教員になりたいと考えている	305	0.07	0.81	*	0.01
	教員になりたいが他の仕事にも興味がある	316	0.01	1.04		
	教員免許は取得したいが教員になるつもりはない	93	-0.17	0.93		
	教員になるつもりはない	23	-0.38	1.33		
親しみのある 学級担任	教員になりたいと考えている	305	-0.02	0.81	*	0.01
	教員になりたいが他の仕事にも興味がある	316	0.07	0.95		
	教員免許は取得したいが教員になるつもりはない	93	-0.08	0.88		
	教員になるつもりはない	23	-0.44	1.11		
子どもの主体性を 重視する学級担任	教員になりたいと考えている	305	-0.01	0.77	ns	0.00
	教員になりたいが他の仕事にも興味がある	316	0.04	0.78		
	教員免許は取得したいが教員になるつもりはない	93	-0.10	0.85		
	教員になるつもりはない	23	-0.03	0.70		

*** p<0.001, ** p<0.01, * p<0.05, ns p ≥ 0.05.

(2) 観察の徒弟制

教師の予期的社会化において重要な概念として取り上げられるのが、「観察の徒弟制 (apprenticeship of observation)」(Lortie 訳書 2021) である。「観察の徒弟制」は Lortie (訳書 2021) の監訳者である佐藤学によれば「教職の道に進む者が小学校、中学校、高校を通して「1万3,000時間」も最も身近な職業として教職を観察し、「徒弟制」のような経験を有していることを意味している」(Lortie 訳書 2021, p. iv) 概念である。日本においても太田 (2012) のように、「観察の徒弟制」に着目して大学生を対象にした分析も行われている。ただし太田 (2012) の分析では、学校におけるリーダー経験を媒介にした間接的な教師の影響を指摘しているに留まっており、「観察の徒弟制」に関する教師の直接的な影響については十分な検討がなされていない。

そこで、ロールモデルとなる教員がいると回答した学生はそうではない学生と比べて望ましい学級担任像に違いがあるのか検討した。表3は独立変数をロールモデルとなる教員の有無⁽²⁾、従属変数を望ましい学級担任像とする t 検定を行った結果である。

表 3 ロールモデルとなる教員の有無による望ましい学級担任像の違い (t 検定の結果)

		N	平均値	SD	有意差	効果量 (Cohen の d)
教職専門性をもつ 学級担任	ロールモデル有り	552	0.08	0.92	**	0.37
	ロールモデル無し	67	-0.27	1.01		
親しみのある 学級担任	ロールモデル有り	552	0.07	0.86	**	0.39
	ロールモデル無し	67	-0.28	1.00		
子どもの主体性を 重視する学級担任	ロールモデル有り	552	0.03	0.76	ns	0.19
	ロールモデル無し	67	-0.11	0.83		

*** p<0.001, ** p<0.01, * p<0.05, ns p ≥ 0.05.

「教職専門性をもつ学級担任」「親しみのある学級担任」は、ロールモデル有りと回答した者は、無しと回答したものと比べて平均値の値が統計上、有意に高かった。この結果を踏まえると、教師を目指す上でロールモデルとなる教師がいる者の方が、教職専門性を有している学級担任や、親しみのある学級担任を望ましいと考える傾向にはある。ただし効果量の値 (Cohen の d) はあまり大きくはなかった。このことから「観察の徒弟制」による影響についても、望ましい学級担任像を形成する上で限定的なものとして推察される。

(3) 大学の授業

教師の予期的社会化において大学における教員養成は重要な役割を担うことになるだろう。教職課程を中心に大学における授業において、学生は学校教育に関する学習を行う。こうした大学の授業に対する意識や経験は大学生が描いている望ましい学級担任像と何かしらの関連があるのではないだろうか。そこで今回は大学の授業への期待や授業への取組別にみた望ましい学級担任像の違いについて検討した。

表4は、独立変数を大学の授業への期待や授業への取組⁽³⁾、従属変数を望ましい学級担任像とする一元配置分散分析の結果である。

表4 大学の授業への期待や授業への取組別にみた望ましい学級担任像の違い（一元配置分散分析の結果）

	大学の授業では専門的知識を得られると思う	N	平均値	SD	有意差	効果量 (η^2)
教職専門性をもつ学級担任	あてはまる	636	0.13	0.68	***	0.12
	どちらともいえない	80	-0.54	1.30		
	あてはまらない	35	-1.17	2.21		
親しみのある学級担任	あてはまる	636	0.10	0.75	***	0.08
	どちらともいえない	80	-0.47	1.16		
	あてはまらない	35	-0.80	1.62		
子どもの主体性を重視する学級担任	あてはまる	636	0.01	0.79	ns	0.00
	どちらともいえない	80	-0.03	0.76		
	あてはまらない	35	-0.19	0.84		

	大学の授業では幅広い知識を得られると思う	N	平均値	SD	有意差	効果量 (η^2)
教職専門性をもつ学級担任	あてはまる	598	0.12	0.72	***	0.08
	どちらともいえない	106	-0.34	1.05		
	あてはまらない	45	-0.86	2.11		
親しみのある学級担任	あてはまる	598	0.09	0.78	***	0.05
	どちらともいえない	106	-0.23	0.97		
	あてはまらない	45	-0.69	1.53		
子どもの主体性を重視する学級担任	あてはまる	598	0.01	0.80	ns	0.00
	どちらともいえない	106	-0.01	0.68		
	あてはまらない	45	-0.18	0.83		

	楽しみにしている授業がある	N	平均値	SD	有意差	効果量 (η^2)
教職専門性をもつ学級担任	あてはまる	486	0.11	0.77	***	0.03
	どちらともいえない	137	-0.16	0.98		
	あてはまらない	127	-0.25	1.36		
親しみのある学級担任	あてはまる	486	0.10	0.79	***	0.02
	どちらともいえない	137	-0.11	0.91		
	あてはまらない	127	-0.24	1.15		
子どもの主体性を重視する学級担任	あてはまる	486	0.02	0.81	ns	0.00
	どちらともいえない	137	-0.04	0.75		
	あてはまらない	127	-0.04	0.74		

	授業内容について先生に質問することがある	N	平均値	SD	有意差	効果量 (η^2)
教職専門性をもつ学級担任	あてはまる	289	0.04	0.82	ns	0.00
	どちらともいえない	159	-0.10	1.04		
	あてはまらない	304	0.01	1.01		
親しみのある学級担任	あてはまる	289	0.05	0.83	ns	0.00
	どちらともいえない	159	-0.03	0.92		
	あてはまらない	304	-0.03	0.93		
子どもの主体性を重視する学級担任	あてはまる	289	0.04	0.78	ns	0.00
	どちらともいえない	159	0.01	0.84		
	あてはまらない	304	-0.04	0.77		

	授業を苦痛に感じる人が多い	N	平均値	SD	有意差	効果量 (η^2)
教職専門性をもつ学級担任	あてはまる	289	0.09	0.77	*	0.01
	どちらともいえない	268	-0.12	1.10		
	あてはまらない	194	0.05	0.95		
親しみのある学級担任	あてはまる	289	0.09	0.82	*	0.01
	どちらともいえない	268	-0.11	0.98		
	あてはまらない	194	0.01	0.85		
子どもの主体性を重視する学級担任	あてはまる	289	0.10	0.83	*	0.01
	どちらともいえない	268	-0.05	0.76		
	あてはまらない	194	-0.07	0.76		

*** p<0.001, ** p<0.01, * p<0.05, ns p \geq 0.05.

まず大学への授業の期待（「大学の授業では専門的知識を得られると思う」「大学の授業では幅広い知識を得られると思う」）については、「教職専門性をもつ学級担任」「親しみのある学級担任」において統計上、有意な差があった。いずれも「あてはまる」が「どちらともいえない」「あてはまらない」の平均値より高い値を示していた。大学への授業について期待を持っている学生はそうではない学生と比べて、「教職専門性」や「親しみ」のある学級担任を望ましいと考えていることがわかった。他方、「子どもの主体性を重視する学級担任」については統計上、

有意な差はなかった。

続いて「楽しみにしている授業がある」についても、授業への期待同様に、「教職専門性をもつ学級担任」「親しみのある学級担任」において統計上、有意な差があった。ただし効果量(η^2)の値は授業への期待と比べて小さかった。なお「授業内容について先生に質問することがある」については望ましい学級担任像のいずれも統計上、有意な差はなかった。

「授業を苦痛に感じるが多い」についてはその他の項目とは異なる結果となっていた。まず、望ましい学級担任像に関する3つの因子すべてにおいて統計上、有意な差があったものの、平均値の値を見てみると、それぞれ異なる結果となっていた。「教職専門性をもつ学級担任」「親しみのある学級担任」については「あてはまる」「あてはまらない」の平均値が正の値であったのに対し、「どちらともいえない」のみ負の値であった。すなわち授業が自分にとって苦痛なもの、すなわち自分にとって意味があるかどうか判断がつかない学生は、「教職専門性をもつ学級担任」「親しみのある学級担任」が望ましい学級担任であるということができないと考えられる。他方、「子どもの主体性を重視する学級担任」については「あてはまる」のみ正の値であった。自分自身が大学の授業に苦痛を感じると考える学生は、学級において子どもの自主性を尊重する教師が望ましい学級担任だと考えているといえるだろう。

3 望ましい学級担任像と教職イメージ

望ましい学級担任像と教育言説との関連を見るために、本稿では教職に関するイメージを取り上げ、望ましい学級担任像との関連について分析を行った。

関連を検討する前に、教職イメージに関する項目を用いて因子分析を行った。分析には「教師の仕事に対するあなたのイメージとして、次の項目はどの程度、あてはまりますか？」という設問に対して、設定した14項目についてそれぞれ「とてもあてはまる」から「まったくあてはまらない」の5件法で回答を求めた結果を用いた。算出された因子の解釈可能性等を踏まえた上で、14項目で最尤法による因子分析を行い、因子数3でプロマックス回転を行った結果を採択した。分析結果は表5の通りである。

第1因子は「子どもの成長に関わるやりがいのある仕事である」「社会の人材を育てる重要な仕事である」など教職はやりがいのある仕事と捉える項目によって構成されていた。そこで第1因子を「教職＝やりがいのある仕事」と命名した。

第2因子は、「休みが多い仕事である」「給料が高い仕事である」など教職の労働条件はよいと捉える項目によって構成されていた。そこで第2因子を「教職＝好条件」と命名した。

第3因子は、「忙しい仕事である」「苦勞しても報われない仕事である」といった教職の負担が大きい仕事と捉える項目によって構成されていた。そこで第3因子を「教職＝高負担」と命名した。

因子分析の結果と合わせて、各因子を構成する項目の基礎統計量についても確認しておきたい。第1因子を構成する教職のやりがいに関わる項目の平均値はおおむね4以上と高かった。このことから多くの学生は教職はやりがいのある仕事であるというイメージを有している。他方、第2因子に関わる「休みが多い仕事である」「給料が高い仕事である」など教職の労働条件の良さを示す項目の平均値は3未満と低い値であったことから、教職の労働条件は高いと考えていない学生が多いことが確認された。さらに第3因子を構成する「忙しい仕事である」の平均値が4.77と非常に高いことからわかるとおり、教職は高い負担を強いられる仕事という

イメージを有している傾向にあった。

表 5 教職イメージに関する項目の基礎統計量と因子分析結果（因子パターン）

項目内容	基礎統計量		因子負荷量			
	平均値	SD	I	II	III	
I 教職＝やりがいのある仕事						
子どもの成長に関わるやりがいのある仕事である	4.56	0.67	0.78	-0.05	-0.07	
社会の人材を育てる重要な仕事である	4.54	0.70	0.71	-0.03	0.03	
子どものためになる仕事である	4.64	0.65	0.69	0.05	0.11	
世の中のためになる仕事である	4.28	0.80	0.65	0.11	0.04	
楽しい仕事である	3.77	0.96	0.60	0.24	-0.28	
みんなから尊敬される仕事である	3.62	0.98	0.40	0.39	0.04	
II 教職＝好条件						
休みが多い仕事である	1.86	0.92	-0.08	0.59	-0.12	
給料が高い仕事である	2.95	0.98	0.03	0.56	0.13	
学力の高い人がなる仕事である	3.22	1.03	0.04	0.51	0.38	
人気がある仕事である	2.64	1.01	0.13	0.47	-0.13	
III 教職＝高負担						
忙しい仕事である	4.77	0.52	0.37	-0.15	0.57	
苦勞しても報われない仕事である	2.94	1.15	-0.46	0.20	0.55	
私生活が制限される仕事である	3.96	0.92	-0.01	0.02	0.50	
責任が重い仕事である	4.70	0.54	0.43	-0.15	0.46	
	因子間相関		I	II	III	
			I	1.00	0.16	0.28
			II		1.00	-0.13
			III			1.00

※各項目、選択肢「とてもあてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」を順に5、4、3、2、1と割り当てて分析。

※因子分析は最尤法（プロマックス回転）

以下、教職イメージに関わる分析では、表5で示した因子分析結果によって算出された因子得点（回帰法により算出）を用いることとした。

因子分析結果を踏まえ、教職イメージと望ましい学級担任像の関連を検討するために、相関係数を算出した。分析結果は表6である。

教職専門性をもつ教師や親しみのある学級担任を望ましいと考える者は、教職はやりがいのある仕事というイメージをもつ傾向にあることがわかった。このことは「教職＝やりがいのある仕事」と「教職専門性をもつ学級担任」の相関係数は0.509、「親しみのある学級担任」の相関係数は0.421と大きな正の値を示していたことからいえる。ただし同時に、教職専門性をもつ教師や親しみのある学級担任が望ましいと考える者は、教職は負担が大きな仕事というイメージをもつ傾向にあることがわかった。このことは「教職＝やりがいのある仕事」と「教職専門性をもつ学級担任」の相関係数は0.355、「親しみのある学級担任」の相関係数は0.305と中程度の正の値を示していたことからいえる。

子どもの主体性を重視する学級担任が望ましいと考える者も教職はやりがいのある仕事というイメージをもつ傾向にあった。これは「教職＝やりがいのある仕事」と「子どもの主体性を重視する学級担任」の相関係数が0.212と正の値であることからいえるが、相関係数の絶対値はやや小さいものであった。

また「子どもの主体性を重視する学級担任」と「教職＝好条件」の相関係数が正の値で0.152を示していた。相関係数の値は必ずしも大きくはないが、教職は条件が良い仕事であると考え

る者は、子どもの主体性を重視する学級担任を望ましいと考える傾向にあるといえるだろう。「教職＝好条件」については「親しみのある学級担任」についても正の相関はあったが相関係数の値は 0.118 と小さく、さらに「教職専門性をもつ学級担任」については相関係数が 0.042 と値が非常に小さいと同時に統計上、有意な値ではなかった。「子どもの主体性を重視する学級担任」は他の望ましい学級担任像とは異なる教職イメージとの関連がみられたことは興味深い点である。

表 6 教職イメージと望ましい学級担任像の相関係数

	教職専門性をもつ 学級担任	親しみのある 学級担任	子どもの主体 性を重視する 学級担任
教職＝やりがいのある仕事	0.509 ***	0.421 ***	0.212 ***
教職＝好条件	0.042 ns	0.118 **	0.152 ***
教職＝高負担	0.355 ***	0.305 ***	0.074 *

※ 係数はピアソンの相関係数
 *** p<0.001, ** p<0.01, * p<0.05, ns p ≥ 0.05.

IV まとめと考察

本稿は、教職課程を履修している大学生を対象に実施した学級経営に関する意識調査のデータを用いて、望ましい学級担任像に関する大学生の意識を分析した。分析結果の要約ならびに考察を行い、今後の研究課題について述べたい。

1 画一化された望ましい学級担任像

教師像に関わる教育政策上の議論として、これまで中央教育審議会において「教師に求められる資質能力」に関連する議論と答申が出されてきた。2017 年には改正教育公務員特例法が施行され、各都道府県の教育委員会等において「学校教員育成指標」が策定するに至った。これは教育行政が教師として求められる資質能力を明示したこととなる。このことにより曖昧に捉えられていた教師の資質能力について学校教育関係者が認識を共有することができたことは良かった点と捉えることが出来るかもしれないが、同時に求められる教師の資質能力の多様性が捨象されると解釈することもできるだろう。

本稿では学級担任について資質能力に限定せず、大学生が考える望ましい学級担任像の記述分析を行った。その結果、明らかにされた望ましい学級担任像は画一化されたものであったといえる。表 1 で示した因子分析の結果より、今回は望ましい学級担任像の 3 つの因子が抽出されたが、とりわけ「教職専門性をもつ学級担任」に関するそれぞれの項目の基礎統計量をみたとき、平均値が 4.5 前後の項目が大半を占めていた。たとえば「授業が上手な先生」「コミュニケーション能力が高い先生」などは確かに望ましい学級担任像として否定する大学生が少ないことは首肯できる。しかし 5 件法の回答結果で平均値が 4.5 前後というのは、ほとんどの学生が「とてもあてはまる」と回答していることとなり、授業が上手なことやコミュニケーション能力の高さが本当に学級担任にとって必要なことなのか、ということに疑う大学生がほとんどいないと捉えることが出来る。

分析に用いた望ましい学級担任像に関する項目を修正、追加を行い、因子分析等を行えば今

回の結果では見いだせなかった多様な望ましい学級担任像を明らかにすることが出来るかもしれない。このことは今後の分析課題ではあるのだが、「教職専門性をもつ学級担任」を中心にそれを望ましいとして肯定する大学生の割合が極端に多かったということは、何を望ましいと考えるか、学級担任観の多様性が喪失されていることを示唆させる重要な結果であろう。

2 予期的社会化の限界と教育言説

予期的社会化に関わって、Lortie（訳書 2021）は「観察の徒弟制」について教職の社会化という点からは限定なものであると捉えている。すなわち子どもの視点から教師の指導支援を観察することは出来ても、それは教師の表面的な姿に過ぎず、指導支援の背景にある教師の教育観や指導観までは理解できない。観察の徒弟制は教師理解という点からいえば部分的な側面のみ予期的社会化といえる。

今回の分析結果においても望ましい学級担任像において予期的社会化の関連は限定的であった。教員志望の程度による望ましい学級担任像に違いはあるものの、効果量からその違いは限定的であること（表 2）に加え、ロールモデルとなる教員がいるかどうかを直接的に質問しても、効果量の値を見てみるとロールモデルとなる教員には望ましい学級担任像に大きな違いを与えるような影響はないといえるだろう（表 3）。

大学における教員養成に関わる点として、大学の授業との関連については授業への期待は、「教職専門性をもつ学級担任」「親しみのある学級担任」において統計上、有意な差があると同時に効果量の値も大きかった（表 4）。ただしこれは大学において望ましい学級担任像の変容がもたらされているのではなく、強化されている可能性が示唆される。特に「大学の授業では専門的知識を得られると思う」において効果量の値は大きかったことから、そもそも「教職専門性をもつ学級担任」を望ましい学級担任像とする学生は、授業の内容に関係なく、高等教育機関である大学では高い水準の専門性について学習できるとははじめから期待しているのではないだろうか。

このように考えると望ましい学級担任像を形成する上で、予期的社会化には限界が見出される。予期的社会化は望ましい学級担任像にそれほど影響を与えることはなく、さらに教員養成においてはもともと有していた望ましい学級担任像を強化するに留まっている可能性が示唆された。

他方、今回の分析結果で注目すべきは教職イメージとの関連である。教職専門性をもつ教師や親しみのある学級担任が望ましいと考える者は、教職はやりがいのある仕事というイメージをもつ傾向にあると同時に、教職は負担が大きな仕事というイメージをもつ傾向にあることがわかった。

先述の通り学生の教職イメージは昨今、流布している教育言説（たとえば教職はやりがいのある仕事であるが、ブラックな仕事）を投影している可能性がある。さらに「[「聖性」を強く帯びた教育言説は宗教教義のような性格をもち、それ自体についての分析的批判的議論がタブー視されるようになり、教育に関する認識や価値判断の自明の枠組みとなり、教育実践の動機づけや指針として機能する]」（今津 1994, p.48）。望ましい学級担任像が画一的なものとなっているということを指摘したが、それは教師に関わる教育言説が強まり、多様な学級担任像を描くことを許容できなくなっているのかもしれない⁽⁴⁾。

3 子どもの主体性を重視した学級にむけて

本稿において学級担任像に着目した理由の1つは、それが学級担任の指導支援のあり方に影響を与える可能性があるためであった。この点を踏まえ、子どもという視点から今回の結果を見たとき、望ましい学級担任像において、子どもというものがあまり重視されていない事が指摘できる。これは表1において「子どもの主体性を重視する学級担任」を望ましい学級担任像と肯定的に捉えている大学生があまり多くなかったという結果からいえる。

「子どもの主体性を重視する学級担任」という子ども自らの行動や意思が尊重される学級担任像が望ましいとされないということは、「学級の中心は子どもではなく教師」と捉える意識があることが示唆される。ところが実際の学級は「教師によって管理できないインフォーマルな場面（児童生徒の人間関係、目の届かない休憩時間や場での行動）」（白松 2017, p.27）がある。そのことを踏まえ白松（2017）は子どもたちが主に特別活動を通じて、児童生徒が学級経営に参画できることを日本の学級経営において特徴的なものと述べている（白松 2017, p.27）。今回の分析結果は、これまで日本の特徴とされてきた子ども中心の学級づくりが教職課程を履修している大学生の中であまり支持されなくなっていることが示唆される。

以上を踏まえたとき、今後、私たちは学級担任と子どもの関係についてどのように考えていけばよいのだろうか。研究上の課題としては、望ましい学級担任像を含む教師像とその背景にある教育言説を批判的に捉えると同時、教育言説からの支配の解放を目指した議論の展開が必要となるだろう。昨今の教育に関する議論は教師に関わるものが非常に多い。たとえば教育社会学者の内田良は、教師の勤務実態の厳しい状況を Twitter などの SNS を活用しながら拡散し、同時に関連する書籍も出版している（内田 2018）。他方、子どもに関わる教育議論はそれほど活性化されていないように思われる。そうしたとき、教育研究において子どもに関する分析の重要性が高くなっているのではないだろうか。

4 教育言説からの解放と学生のキャリア形成

本稿において学級担任像に着目する理由の2つ目として、学級担任像は教職生活における苦しみ の源泉となる可能性があることをあげていた。この点についても分析結果に基づきながら、考察したい。

分析結果から指摘できることは、支配的な教育言説からの解放は、学生のキャリア形成にも重要であるということである。望ましい学級担任像でいえば、教職の専門性を高めることが重要という意識を持つ者が多かった。無論、教職の専門性の重要性は否定されるものではないが、表6でみたとおり教職の負担が強いイメージなどと関連があった。教職の専門性を重視する意識が強い「真面目な」学生は、教職の魅力も感じつつも、教職の大変な姿にも苦しめられている可能性がある。ところが表6にあるとおり、「子どもの主体性を重視する学級担任」を望ましい学級担任像と捉える学生は、教職は条件の良い仕事であると考えている。そうした学生は教職に関わる今日の教育言説から解放されている可能性が示唆される。

昨今、議論の俎上に上がらない教師の仕事の実態にも焦点を当てながら、教職の多様な姿を描き出すことが重要だろう。そうした議論が多様な学級担任像の形成につながるかもしれない。このことは大学生のキャリア形成にとっても意義あることであり、この点からも教育言説の呪縛からの解放を目指した教育研究の推進が求められる。

5 今後の研究課題

最後に本稿に残された研究課題について述べたい。特に妥当性、すなわち「測定の適切性」(稲葉 2014) という点において、本稿の調査ならびに分析結果には次の2点から課題が指摘されるだろう。

1 つは調査対象者についてである。本稿の分析で用いた調査は、対象となる大学の設置者等には配慮しながら実施されたものの、実際は一部の大学の学生のみを対象にしていた。予期的社会化についての考察を深めるのであれば、本稿の知見を参考にした上で、たとえば教員養成カリキュラムの違いにも配慮した形で、調査対象校を選定した調査の実施等を今後検討していくことが、分析結果の外的妥当性を高める上で重要である。

第2は、教職イメージが教育言説を投影していると解釈することについてである。すなわち本稿では教職イメージの項目が教育言説の何かしらを測定していると捉えたうえで分析結果を解釈した。このことは質的研究における言説研究の蓄積(高橋・天童 2017)や、教師批判に対する教師の語りに着目した伊勢本(2018)の研究から示唆を得ており、質的研究の知見を量的研究の結果解釈の方針に持ち込んだ上で本稿の分析には一定の意義はあると考えられる。ただしそのような解釈は適切であったかどうかについて、構成概念妥当性などの点から今後、改めて検討することも必要である。

謝辞：本研究は JSPS 科研費 JP19K21776 の助成を受けたものである。

注

- (1) 本稿の分析で用いた調査データは、長谷川・白松(2023)において用いた調査データと同じである。調査方法や対象者の概要はすでに長谷川・白松(2023)において説明しているため、本稿においては概要のみ記述している。なお長谷川・白松(2023)は、望ましい学級像の中でも主に学級における子どもに関する項目を用いて分析を行っているのに対して、本稿は学級についても主に学級担任、すなわち教師像に関する項目の分析を行った。
- (2) ロールモデルとなる教員の有無については、表2で示した教職への指導の程度に関する回答において「教員になりたい」と回答した者(具体的には「教員になりたいと考えている」「教員になりたいが他の仕事にも興味がある」のいずれかを選択した者)に限定した質問「あなたはこれまで、「教師としてのロールモデル(見本)」となるような先生に出会ったことがありますか?」の回答結果である。
- (3) 表4で示した大学の授業への期待や取り組みは、「大学での授業に関する次のような項目について、あなたにどの程度あてはまりますか?」という設問に対し、それぞれ「とてもあてはまる」から「まったくあてはまらない」の5件法で回答を求めた結果を用いている。分析に際しては、「とてもあてはまる」「ややあてはまる」を「あてはまる」、「どちらともいえない」は「どちらともいえない」、「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」は「あてはまらない」と再割り当てした。
- (4) 無論、教職イメージもまた予期的社会化において形成される可能性があることである。ただ大学の教員養成も教育言説の影響を免れないことを考えると、教育言説からの影響を除いて、望ましい学級担任像を含む教師像を学生が形成することは困難であると推察される。

参考文献

- 長谷川祐介・白松賢, 2023, 「大学生が考える望ましい学級とは? —これからの学級経営にむけた教員養成の課題—」『大分大学教育学部研究紀要』第44巻第2号, pp.209-220。
- 今津孝次郎, 1994, 「教育言説としての「生涯学習」」『教育社会学研究』第54集, pp.41-60。
- 稲葉昭英, 2014, 「統計的基本概念 妥当性」社会調査協会編『社会調査事典』丸善出版, pp.212-213。
- 伊勢本大, 2017, 「《教師批判言説》の呪縛 —「子ども理解」をめぐる小学校教師の解釈実践—」『教育社会学研究』第100集, pp.347-366。
- 川村光, 2003, 「教師における予期的社会化の役割 —どのような教師が教師文化を担うのか—」『日本教師教育学会年報』第12号, pp.80-90。
- Lortie, Dan. C, 1975, *Schoolteacher: A Sociological Study*, University of Chicago Press.
(= 2021, 佐藤学監訳, 織田泰幸・黒田友紀・佐藤仁・榎景子・西野倫世 訳『スクールティーチャー - 教職の社会学的考察 -』学文社。)
- Merton, Robert. K, 1949, *Social Theory and Social Structure: Toward the Codification of Theory of Research*, The Free Press. (= 1961, 森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎 訳『社会理論と社会構造』みすず書房。)
- 太田拓紀, 2012, 「教職における予期的社会化過程としての学校経験」『教育社会学研究』90巻, pp.169-190。
- 白松賢, 2017, 『学級経営の教科書』東洋館出版社。
- 高橋均・天童睦子, 2017, 「教育社会学における言説研究の動向と課題 —権力・統治・教育言説—」『教育社会学研究』第101集, pp.153-183。
- 高井良健一, 2005, 「教師研究の現在」『教育学研究』第74巻第2号, pp.251-260。
- 内田良, 2018, 『教師のブラック残業 ～「定額働かせ放題」を強いる給特法とは?!～』学陽書房。
- 山田浩之, 2018, 「ゆらぐ教師像」日本教育社会学会編『教育社会学事典』丸善出版, pp.438-439。

University Students' Perceptions of Desirable Classroom Teachers

– The Limits of Anticipatory Socialization of Classroom Teachers and the Spell of Educational Discourse –

HASEGAWA, Yusuke and SHIRAMATSU, Satoshi

Abstract

This paper presents an analysis of data from a survey of attitudes toward classroom management conducted among university students taking a teaching course. First, we examined the image of a desirable classroom teacher as conceived by university students; second, we analyzed the relationship between the image of a desirable classroom teacher and the anticipatory socialization of teaching; finally, we investigated the relationship between the image of a desirable classroom teacher and that of the teaching profession.

The analysis revealed that many university students consider the standardized image of a “classroom teacher with teaching expertise” to be desirable. The anticipatory socialization of the classroom teacher was found to have limitations. Furthermore, it was suggested that university students see the classroom teacher in a favorable light under the constraints of educational discourse. The paper then discusses classroom management that emphasizes children’s independence and liberation from the dominant educational discourse.

Key words : Classroom Teachers, Anticipatory Socialization, Educational Discourse